



石井明道心
七二

~ 13
3368
4



18
3363
4



石井明道志卷の七

目錄

一 平井權八由緒長壽の道事

大正十年八月廿九日
本大學出版部氏 贈

しよんしの馬場を小車利、其馬が
籍をまき入道の居大、此を
しよん馬場を、徳田平、其馬の
登城し、中今大、其馬の馬場を
居大の、其馬の、其馬の、其馬の
の、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の
其馬の、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の
から、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の

あ、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の
誰人、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の
苦、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の
な、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の
しよん馬場を、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の
其馬の、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の
大、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の
其馬の、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の、其馬の

うらやまの海にまはるる塩を
退治せしむる又がまのりのはらへ
海にまはるるしるし権八しるし塩を
のちとておぼすとてはなはちしるし
新氣とておぼすとて思ふに仰るは
海にまはるるしるしをなす
とのしるし又がまのりとはなはちしるし
知れし権八しるしをなす

新氣とておぼすとて思ふに仰るは
海にまはるるしるしをなす
とのしるし又がまのりとはなはちしるし
知れし権八しるしをなす
新氣とておぼすとて思ふに仰るは
海にまはるるしるしをなす
とのしるし又がまのりとはなはちしるし
知れし権八しるしをなす

此の事ある書色と海へて年
八月下旬に故と尋ひて
しと吉物と平井權八と
柳と文と討てて謀るを
立退る所ありしと
中島徳と大坂と
仰成代共口安坂平良
その親類ありしと尋
ひて

及ぶる事ありしと尋
ひて
親父は法蓮の岡に
由は二人の輝と
と中波とと和とと
某と親とと大坂と
一名ととと天中
とと親なりしと尋
ひて

毛のしと口を後小大事小あふ
海糸糸親父も田舎の御押
病氣病氣の籠ひつゝ是
書状はあまのあまの是と
しつゝ行つゝも去つゝ
今も年々親父も
着大坂あまのあまの
早もつゝと去つゝとあまの

羨望の心をあまのあまの
去りぬが權ハ二言とらふ
あまの是非もあまの
去つゝと去つゝと去つゝ
去つゝと去つゝと去つゝ
りつゝと去つゝと去つゝ
あまのあまのあまの
あまのあまのあまの

尾名橋より一息し安ら九月廿
都と立ちく江戸へ下りて備り
拾と早稲米穀三石の備部心
おと敷き男あつて東大坂の地
警昌橋より世界の金銀地を江戸
へ下りて備りか 警昌橋
の地ありて金銀地ありて
銀地ありて金銀地ありて

世界より金銀地ありて事ありて
叶ふまじ敷きなり金銀地ありて
とちありて金の支分なり
千石ありて大衆人ありて
都より身の内息ありて
備りて金銀地ありて
旗名ありて備りて
備りて備りて

夫を連と歩ゆりふ平井權八
此ともしと終女の強よし
高きと歩ゆりふ彼の男
是も世との習ひは眼よあふん
拙者よと歩ゆりふ此は高き
歩ゆりふ小僧りふるものなりて
歩ゆりふと歩ゆりふ海道は

窟——と抱女をきき定あ
金きよふと歩ゆりふ此は高き
中事ぬ織りぬぎあふん
しるい歩ゆりふもろき
火と歩ゆりふ此は高き
あふん歩ゆりふ名うふ
火事ぬ織りぬぎあふん
一歩ゆりふと歩ゆりふ

神宮をたふし海をまはるとかきしこもを
しりたしよの国をさへくもまを
大雲正道ののちひひく石川女を
源と清ぎしよふと源清を
鴨海院の環月小長巻とらふ
そののりまの町人あはれも武蔵小
達一か量火の類を物まじ
活々人小頼まらるる書一合小

くてもまを油と弱ふとゆふ
活々と桐よ小好も大なる魂を
りつゝ中男達の太鼓と
羽をりあがと源自事り月と
強倉の類をとく神楽川のふ
外をさしよと清をて茶碗よま
あをまはれとを体とてあをる
長巻巻権八が英男よんといふ

うつて威いり然しかれぬの男おとこ達たち也なり
りしるままい血ちのこもも後のちにいふ
そららをを磨こぐをを權けんハハ支し給たまふ
是このこ事ことのの早はや速すみなな言ことば類るいとと仕して
ささああららいい別べつ心こころああららせせしし
考かんへへししけけとと考かんへへるる長ながきき考かんへへるる友とも小
屋こや大おほ權けん也なりととししるる小こ歌うた者もののの
末すえ代しろははああららいいととああららいいととああららいい

板いた上の上ににああららいいとと屋や大おほ親おやとといいふふ
柴しばがが仕しりりああららいいとと外そと言ことば大おほ治ち也なり
小こ佛ほとけ小こ名な也なり殺ころ馬うまはは命いのちをを奪さらふふ
長ながきき考かんへへるる今いま思おもひひをを是こゝににああららいいとと
權けんハハああららいいとといいふふ始はじめとといいふふ
事ことああららいいとといいふふとといいふふとといいふふ
りりとといいふふとといいふふとといいふふ
強つよいいとといいふふとといいふふとといいふふ

深川龜井一利の神社集國を
見ゆともある我國の邦にありしと
思ひしふ大坂のころと國と海と
又江戸をよみんのか大坂のころと
好む天下の御座りやと本場
思ひしとありふりふりおるを九月
たよりふちふり大坂の権を御座り
はしむるよし出はせしむる本

末の月人の道中をとりて病を
えんが致しし進むるありし長
白のありしと録して候し權八
進むるありしと録して候し權八
のの小袖ふりしと録して候し權八
御座りしと録して候し權八
進むるありしと録して候し權八

善くも一ツ張りの紙を
うんと上りしり
あつて迎候知れ
すけり編みと
あつて授けし
顔はけり
授けし
花の葉と

清くも一ツ張りの紙を
善くも一ツ張りの紙を
あつて迎候知れ
すけり編みと
あつて授けし
顔はけり
授けし
花の葉と

少嶋分天の海、地
海はふろえ末との地を國と
名はくふ如流りの海列の地
ありふらむ御名山の地
小りの牛の法眼坂の地
大老年と和合の地
乃少の地
善通のよ列の地

貴なる海を原の地
のト男梅の地
名はくふ如流りの海列の地
ありふらむ御名山の地
小りの牛の法眼坂の地
大老年と和合の地
乃少の地
善通のよ列の地

姑の親と長子一列の御事
の事ゆゑにまゐりおられ
後一り稽古におかされ
七月八日金銀の待りの事
天和元年三月の御事
金銀の待りの事
さあふ時をさしおの
あはれおの事

権八と金銀の御事
八重の御事
古の御事
車かこつた御事
小吹の御事
金銀の御事
御事の御事
御事の御事

見ると出ゆふ糸とてさくの
身とありて羽衣のふ運あ
権へと付ん事けひ御とま
持んれいもさきついでと
あそしし糸は深あとおき
句神をの糸と春とおの
句中しと河をさそくを
末のふ寺糸とさしとゆふ

多福と下書の本のえふと
あそしし糸と春とおの
権へ糸線の中とさしと
とてが糸へが糸と糸の中
糸と糸と糸と糸と糸と
糸と糸と糸と糸と糸と
糸と糸と糸と糸と糸と
糸と糸と糸と糸と糸と
糸と糸と糸と糸と糸と
糸と糸と糸と糸と糸と

源をいふに源村のひのこを
志をいふに源村のひのこを
用ひて其の事を知るに
是を源とて用ひて其の事を知るに
平井小次郎の事を知るに
其の源を知るに
其の源を知るに
其の源を知るに
其の源を知るに

源をいふに源村のひのこを
志をいふに源村のひのこを
用ひて其の事を知るに
是を源とて用ひて其の事を知るに
平井小次郎の事を知るに
其の源を知るに
其の源を知るに
其の源を知るに
其の源を知るに

長門の石の跡と伝言の
端をて来入る年の石を渡の
ゆを話とつて世と去の好も
備くふ由法は皆ふ支つらき
ま公も遠く忠をて法ら
考くつるふ紫をて際く外ふ
系と調ふまの是か
眼をさしつるふ折果つるも

あは是れ一ツま致大海
とらんとは是れはつるまの
りつてはまの御はあまの
海をて是れは是れは月をふ
波をて是れは是れはまのま
下はは燈つてはははははは
世ふ知らまははははははは
るるまの何人あはははははの

居る者人への研と在る
りしものごとを強を強ふく
量屋を返く徳をよま
おろそか拾石の
出る物と列は
三飛船し
高し
石井明道志卷の八終

石井明道志卷の八終

あな子殿

一かふん

明道下年

平

